

2 当面の外交問題

ベトナム紛争と日韓交渉の妥結

今日は、御当地豊橋の国民協会ならびに自民党支部の主催で、この演説会が持たれたと聞いております。わが自由民主党は、いつまでも、少数の資本家から献金を受けて党の運営をやるようでは困る。政党が国民の政党として、国民と国の運命を担う責任を持っている以上は、広く全国民から浄財をあおいで、公明にかつ雄渾に党の運営をしていかなければならない。そういう考えに立つて四年ほど前に国民協会が組織されたわけであります。当時の池田総理は異常なほどの熱意をこの国民協会の設立に傾けられたのであります。幸いただいまでは全国に約六万の個人会員と約六千の法人会員とを擁して、月額約八千万円という尊い財源が自民党の財源となっておるのでございます。しかし、自由民主党としても本部、支部のやりたい仕事はたくさんありますし、他の政党に比べて党財政の規模は小さ過ぎることはあっても大き過ぎることはないのではありません。こうした仕事を遂行するためには、どうしても経常費として月額二億円くらいはほしいというのが、私どもの切なる希望であります。国民協会の支部の方々には、もっとご奮発をお願いしたいというのが、ただいまの状況であります。

だいたい政治というものは、政治家だけの仕事ではありません。皆さんは皆さんの立場において、それぞれ日本の政治に関与されておるのであります。国民の間に立派な秩序が確立し、立派な倫理が生かされ、そして経済が発展していくという土台がなければ、政治家がいかに逆立ちを致しましても良い政治はできない。私は政治というものは、国民の全部の演奏するオーケストラみたいなものだと思います。タクトを振る指揮者があり、大勢の方がいろんな楽器を持っているような音色を出され、その全体が大きな調和と重量感をもって聞く者に感銘を与える、あのオーケストラのようなものであると思います。私も一つの楽器をもって、政治家としての音色を出しておるにすぎない。皆さんは皆さんでそれぞれ得意とする楽器を持たれて、皆さんの日常の仕事と生活を通して日本全体のオーケストラの演奏に参加されておるのだと思います。すべての国民が「政治は自分達の仕事である」という意識が出てくるところから、日本の政治は生々と発展してまいり、浄化してまいり、能率を増してまいり、信用を増してまいるものと思います。皆さんは参政権のほか国民協会への献金という形においても、政治に参加される機会をもたれておるわけでありませぬ。

私はいつも実業界の方々に申し上げておるのです。あなた方が政治に関与することを何か悪いことでもあるかのように思われて、政治は政治家にやらしておけばよい。自分達はたるべく政治

に関与しないんだということになると日本の政治はよくなる。われわれは小なりといえども代議士として、あるいは参議院議員として組織のないところに組織をつくり、選挙という選挙にはいいしれぬ苦勞をし、体も心も休まる暇のないくらい努力し、泥んこになって日本の政局の安定と国民の幸福のために、ともかくも働いておる。だからいまの政治家もご苦勞である位の一片の同情をもっていただいても別に天罰は当るまい。私は日本が本当に優れた国として世界の信用を勝ち得、世界の尊敬を受けるに値する国になるためには、全国民がそれぞれの立場で政治家に理解と同情をもっていただき、自らもその仕事を通して政治に参加するという政治意識に目覚めていただき、私ども政治家を大いに叱咤激励して、悪いところがあったら遠慮なくこれを責める、良いところがあれば褒めてもやろうというくらいにの気持になつていただかねばならぬ。本日御来会の方々にもそういうことを申上げ、是非そのように御奮発をお願いしたいものと思うのであります。

折角のお申出もありますので、私はこれから最近の外交問題、すなわちベトナムの問題と日韓交渉の問題について、私見をお話申し上げ、皆さんといっしょに日本人としてこれらの問題をど

う考え、これらにどう対処すべきかについて考えてみたいと思います。

ベトナムの紛争は一向に片付きそうでないし、アメリカの介入も日と共に拡大されているようだが、一体この紛争は大きな熱い戦争になるのかどうか、もしこの紛争が大きな熱い戦争になれば、日本もそれに巻き込まれるようなことになりはしないかというのが、大方の日本人に共通の憂えであります。このことは、毎日の新聞の一面、二面の大半が、ベトナムの報道にさかれることをもってしても、理解するに苦しくないところであります。

てっとり早く私の結論から先に申し上げますならば、私はこの戦争は大きくはならない、熱くはならない、こう思っております。その理由を申し上げます。

第一に、二月七日、アメリカがドンホイという北ベトナムの基地を爆撃しました。あの直後アメリカ政府は国連をはじめとして、ソ連、日本その他の主要な国に直ちに覚書をよこしております。そういうことが書いてあるかと申しますと、ベトコン（南ベトナム民族解放戦線）が南ベトナムの平和と独立と自由を乱す蠢動をつづけているが、その要員の訓練、指揮あるいは武器の供与は北ベトナムがしておるといふ歴然たる証拠がある。そういうことが公然と行なわれる限り、世界の平和は維持できない。しかし北側がそれをやめたらこちらも直ちに手を引く用意がある。アメリカはベトナムに対し領土的野心もなければ経済的野心ももっていない。また北ベトナム政

府の転覆も考えていない。ただ南ベトナム政府の要請によってその自由と独立を守るために、必要最少限度の報復措置をとっているのであって、それ以上の他意はない、というのがであります。その後のジョンソン大統領やアメリカ政府首脳の報告や演説を読みましても、アメリカ側の態度はこの覚書でうたった基調を変えておらないということであります。すなわちアメリカ側に一方的な拡大の意図はないということです。

第二にベトナムの場合には、朝鮮事変のときとちがって、中共とソ連がいつしよになってベトナムと北ベトナムの政府を助け、一枚岩の団結をもって、南ベトナムとアメリカにむかってゆくという体制にはなっていないということです。二月七日、アメリカがドンホイを爆撃したかどうかの時に、たまたまソ連のコスイギン首相がハノイでホー・チ・ミンの客となっておりまして、あの時期になぜソ連の総理大臣が北ベトナムを訪ねたかということが、世界の外交界の話題となっておったのであります。大方の見解はおそらくそれは北ベトナムが北京に偏りすぎるものなように、ソ連がハノイを牽制するためではなからうかということでありました。すなわちホー・チ・ミンに対し、北京ばかりが友邦ではない。ソ連もまた貴方の親友であることを忘れないようにということであったと見ておるのであります。余談になるが、私は去年の五月、ネール首相の葬式でインドに参りました。その時ニューデリーの広場で追悼会がもたれました。その席上

私の左側にコスイギン氏が席を占めておりました。眼の真つ青な、色白な、顔面神経をあまり動かさない、見るからに冷徹な感じのする人です。この人がその後フルシチョフの跡をついでソ連の首相になったわけです。コスイギンはハノイの行き帰りに北京に寄っております。北京はいたいコスイギンという客をどのように処遇をしたかということが、これまた私どもの関心事でありました。聞くところによると、北京の空港における出迎え、その夜の接待、これらは一応形ばかりのものであったということです。中共とソ連の間は前々から溝ができておりましたが、今日なおこの溝は深く越えがたいものであるようです。またそれだけの理由もあるようです。同時に中共自体もベトナムをはさんでアメリカと対決する意図をもつてはいないようです。したがって南ベトナムの紛争にソ連と中共が呼吸を合わせて共同歩調をとるとか、中共が単独でアメリカと対決するというようなことはまず考えられないというのが、この戦争が大きくなならない第二の理由であると思います。

第三の理由は戦後、世界各地に局地的な紛争があちこちにあった。ベルリンの危機をはじめとしてコンゴ、キプロス、スエズ、キューバ、中印、印パ等かずかずの局地紛争がありました。これらはすべてボヤの中が終わって、大きな世界的な火事にはならなかったわけです。私はこんどのベトナム紛争もその例外ではないと思っております。それは全世界の国民が平和を欲しておる

からというのではございません。いくら平和を欲しておつても、戦争になるときはなつておりま
す。全世界の教会の鐘が鳴つて、みんなが平和の祈りをささげておるから大きな戦争にならない
というほど甘く考えておるわけでもありません。お祈りして平和がくるほど平和は安価に買える
ものではないと思ひます。また、全国津々浦々の街角で原水爆全面禁止の署名運動があるからで
もありません。平和というのは非常に大事な、われわれの運命を左右する天の贈り物だと思ひま
す。それだけにこれを得るためには大きな犠牲を必要とするものであると思ひます。

それじゃ一体、何が今日の平和を支えておるのかと申しますと、それは核兵器を中核とした各
国の軍事力が、ともかくもバランスがとれておるからだと思ひます。戦争が起つたら今度はえら
いことになるという恐怖が全世界の指導者を支配してある。そういう恐怖とこれに対する慎重な
配慮がバランスしてあるからであらうと思つてあります。核兵器というのはたいへん恐ろしい
兵器であるといわれております。いやこれは最早兵器ではない。学者はこれを最終兵器と呼んで
おります。もともと戦争に奉仕する武器を兵器というのであれば、核兵器というのはもはや戦争
に奉仕するものではない。本来戦争というものは、勝つものと負けるものがあるものであります。
ところが核兵器がもし使われたならば、それはもう勝つものもないばかりか、すべての人間が住
んでおるこの地球という惑星を壊してしまふことになる。そのような状態はもはや、従来觀念さ

れた戦争というものではない。兵器は戦争に奉仕する手段であるなら、核兵器はもはやそういう意味においては兵器ではないというのです。二十年ほど前に原爆が発見され、それから数年たちまして水爆というものが発見された。大きな破壊力を持ったものが沢山貯蔵されておるのですから、ひとたびその蔵出しが始まったらたいへんであります。地球全体が最後になる。そういう情況でありますから、これからは大きい戦争は起らないのではないかと思うのであります。したがって私はこのベトナムの紛争というものも、そう大きくはならないだろうと思っております。しかし私は予言者でないから、当るか当たらないか判りませんが、これまでの経過に徴して、まあだいたい常識的にそう見ていいのじゃないかと思っております。

しかしこの紛争は簡単に片付くものとは思われません。なぜならばこの紛争の性格が極めて厄介なものであるからです。すなわち北と南の戦争目的というものが全然ちがっております。南の方は北からの武力による侵攻が止み、平和と自由が還ってくればそこに平和があるとしております。南ですが、北側はしかく簡単には考えていないようです。南側がいう平和という状態を北側は真の平和だと考えていないわけです。南側は各主権国家がそのとる政体の如何を問わないで、平和の中共存する世界を求めております。つまり柳は緑、花は紅でよしとするのであります。しかしどうも北側はそれは偽りの状態で、すべてが紅にならないと真の平和はこないと考えているように

す。いわば双方が一方は一階で、一方は二階でしこをふみ、相撲をとつておるようなものですか。容易に一致した解決点を見出すことができる状態ではないようであります。だからこの紛争は単なる物理的な武力の闘争ではなく、もっと大きい世界観の角逐というような性質をもつております。だからこの紛争は始めもなく終りもない紛争のような気がしてなりません。もし休戦ということがあるとしても、それは真の解決というものではなく、撃ち合いがなんとなく止つたというような形のものになるのではないかと思われるのであります。またゲリラ戦というものは近代的な意味における武力戦ではなく、ゲリラ部隊一人に対し相手方は二十人も三十人も兵員を要するものであります。敵と味方、戦闘員と非戦闘員の区別もハッキリしない戦闘の形態です。したがってゲリラ戦は、両当事者の間に消耗のバランスがとれていない関係上、永くもちこたえることができるものであります。だから私は、この紛争は相当永く続くのではないかと見ております。

問題はこの事態に対して日本がどう対処するかであります。そのことがわれわれにとつていちばん大切なことです。国内には日本が調停に立つてはという説もあれば、アメリカが北爆をやめるよう勧告しろという意見もあります。私は今日の状況の下においては、このどちらの考えにも賛成いたしかねます。何となれば今日の日本は調停者としてあるいは勧告者としての資格が十分

整っていないからであります。日本がこの紛争の解決に有力な役割を果すためには、アメリカに對しても、北ベトナムに對しても、信頼のある尊敬に値する国でなければならぬ。ところが今日の国力と国内の情況を見ますと、日本はこのままでは到底、世界の平和につき大きい発言力をもつことは遺憾ながらできないと思うわけです。日本の課題はまず眞の調停者になるだけの信頼と力を打ち樹てるように自重し努力することではなければならぬと思うのであります。また仮りに日本が何か和平のためにお手伝いをするとしても、少なくとも今はその時期ではないと思います。今はホットな戦いの最中であり、もう少し事態が進み、双方が戦いに飽いてまいりまして、とりあえずこの撃ち合いだけでもやめようじゃないか、というような雰囲気若干でも出てくれば格別ですが、現在は眞赤になつて喧嘩をしておるのです。そこへ、オイやめたらどうだなどと生意気な口をきこうものなら、双方から輕蔑を受けるのがおちだと思ひます。先ほど申しましたように、日本自体が世界の平和、アジアの平和について、権威ある発言ができるような信頼に値する指導国家になることが根本であります。今日の日本の情況を見ておりますと、日本の現実の対外行動はよほど思慮深くあらねばならないと思ひます。内政の充実と政治信用の確立が第一であります。南ベトナムの事態が今日、悲劇的なものになつた根本の原因は、何といつても南ベトナムの内政が著しく不安定であつたからで、その根本の原因をぬきにしてただ北ベ

トナムとアメリカを攻撃の対象とすることは必ずしも当たらないものと思います。

日本が立派になること、日本が信頼を高めること、日本の発言が権威を持ち得るような国になること、そういうことが外交におきましても、内政におきましても、根本の重要なことだと思ふのであります。地殻の弱いところに火山ができるように、内政の基盤が弱いところにこの種の紛争が起り勝ちです。ベトナムの内政は文字通りその典型的な標本であります。ベトナムの紛争は日本人にとつて決して対岸の火災ではなく、他山の石だと思ひます。内政の充実、政治信用の確立が、その国の平和を守る基礎であると思ひます。ベトナム紛争から、われわれはむしろ、そのことを学びとらねばなりません。

最近の外交でもう一つの問題は日韓交渉であります。

椎名外相の手によつて、日韓国交正常化の諸案件の仮調印をみることができました。永いむづかしい交渉であつたが、椎名さんはよくやってくれました。私は椎名さんに深厚な敬意を表しておるのであります。

もともと外交というものは国と国との間の他人づき合ひであります。愛知県と東京都とのつき合ひではない。韓国と日本とのつき合ひは他人のつき合ひであるはずで、ところが韓国という

国は日本にとってなるほど他人ではあるが、そのようにドライに割り切れない実に微妙な関係にあります。韓国は三十六年間、日本が統治しておったのですが、それが独立いたしました。そしてそれまでは夫婦で暮らしておったが別れることになりました。しかもお互いに隣組なんだから、これからのつき合いのルールを相談しようじゃないかということになった。そしてその前提として片付けなければならぬ懸案を片付けようではないか。これが十四年間も続いた日韓交渉というものなのです。

韓国にしてみれば、日本は三十六年間もわれわれを支配し、耐えがたい屈辱を与えた。考えてみれば胸がむしゃくしゃすることばかりで、恨みはつきない。その精神的、物質的爪あととは計りしれない程深いものがある。いくら金を積んでくれてもこの恨みは消えるものではないというのです。

一方、日本側の気持にしてみれば、三十六年間、悪いことばかりしてきたわけではない。なけなしの資本を朝鮮総督府特別会計や民間のパイプを通して毎年持つて行って、鉄道は敷設し、学校も津々浦々に至るまで建てたじゃないか。ハゲ山だった韓国の山も緑になったではないか。その上、日本政府と日本の国民が汗水たらして築きあげた莫大な在鮮財産は、韓国にそのまま没収されたではないか。なおその上に莫大なゼニをよこせといわれても困るではないかというんです。

向うはいくらくれてもまだ償いきれないものがあるというし、こちらはこれ以上出す余地も理由もないというのである。そういう關係にあったわけです。だからこの交渉は十四年もかかったわけです。何べんやっても一方は二階で四股を踏んでおるし、片方は一階で四股を踏んでおる。相撲をとろうとしても呼吸が合うはずがない。そういうむづかしい状態にあったのです。しかし問題は解決されなければならなかったのです。そこで一昨々年の秋、韓国の金中央情報部長が来日して、私との間に大平・金会談が開かれ、いわゆる大平・金了解事項ができたわけです。

その際、私は金さんに申し上げました。貴方の国の国民が日本に対してもっておられる感情は私もよく理解することができます。しかし日本への恨みことばかりいっておられるだけでは、貴国にとって何ら益するところはないように思われます。恨みは募るばかり、気分はむしゃくしゃし暗い気持になるばかりだと思えます。日本がいやだから引越そうとなされても、二千六百万人の韓国人が越してゆかれるところはないし、日本人にとっても同様です。またそれはわれわれ同時代の者にとってのことだけではなく、われわれの子孫にとっても同様だと思えます。兩國は永遠の隣人であります。だからここらで思い切って一切の過去を一杯の灰として捨て去り、未来の展望に立とうではありませんか。もし貴方の方でそういう気持になっていたいただけるならば、日本としても分別があります。あなたの方はせつかく独立し、困難な国の建設をしなければなら

いわけだから、日本は貴国の永遠の隣人として、相当額の有償無償の経済協力をして、貴国の未来に向つての前進を御手伝ひいたしましょう。そう申し上げたのであります。こうした私の提案に対し、金さんは山のような勇断をもって原則的に応諾されたのであります。私は金鐘泌という方は偉い政治家だと思ひました。そして私と金さんとの間の了解が、今度の条約に取入れられて、その軸心となつたのであります。

当時、池田首相は海外旅行で留守でした。この了解事項を果して池田さんが認めてくれるかどうか、私も実は非常に心配しておりました。池田さんは、財政家だけに對韓焦げつき價権の処理、経済協力の年限や条件等について細々と注意してくれたが、了解事項の本体については快く承諾してくれた。これでやっと日韓交渉において両当事者が同じ土俵の上に降りてきたことになり、その他の案件についても交渉の糸口が開けたわけです。

次に漁業問題ですが、本来公海は自由であるというのが広く認められた国際慣行であります。ところが李承晩氏は朝鮮海峡の真ん中に線を引いて、ここからは韓国の領海だから日本漁船が入ってきたら拿捕する、船員は拉致するという有名な李ラインをしいたのです。これはどうみても乱暴な措置です。韓国の名譽のために惜しむべきことであります。そのため日本漁船にしてもビクビクしながら出漁する。紛争が跡を絶たない。そこでこんなことはやめにして日本と韓国の

間に対等で公正な漁業条約を結びましょう。これが漁業交渉であります。

今度仮調印されました協定の内容ですが、まず専管水域つまり沿岸国だけが漁撈できる海域を内水として、両国の沿岸から十二カイリをそれぞれ認めよう。日本の沿岸から十二カイリは日本の船だけ、韓国の沿岸から十二カイリ以内は韓国船だけがそれぞれ操業する。十二カイリ以内を内水とするということは、国際法的にまだ確立した原則ではありませんが、ソ連とノールウェー、英国とノールウェー等はお互いにこの原則を認め合っておりますし、最近とみに国際的に力をましてきた原則であります。ただ十二カイリの起算点をどこにするか、潮が満ちた満潮線か潮が引いた低潮線かで大分ちがいます。今度の場合、低潮線を基点に十二カイリの専管水域を決めたのですが、困ったことには朝鮮半島の南部には非常に入江が多い。岬や島が無数にある。これを正確に計って低潮線から十二カイリというのでは、専管水域がどの辺なのか漁船がまごまごしなければならぬ。そこで、そういうところには直線基線をとつてよろしいというのが世界に広く認められたやり方でありますから、韓国の南の方に直線基線というのを設け、それを基点に専管水域を定めることになりました。

次は専管水域外のところはどつするかということ。この海域も御多聞にもれず漁業資源が漸次乏しくなつてきておりますので、「共同規制水域」を設けることにいたしました。この水域で

は韓国も日本も平等に規制をつけるわけで、何トンの船を何艘、毎年出漁させることができるのか、そこで使う網の目の大きさや、光力などを決めたわけです。

また、漁業協力についての協定をつくりました。日本の漁業は非常に能率がいい。世界最高の水準にあるんですが、韓国では明治時代のような原始的な漁業をやっているところが多いようです。そこで韓国に九千万ドルの漁業協力資金を貸すことにしました。この借款により、漁船、漁網、水産加工等の施設を日本から買入れ、韓国漁業の生産性の向上に資することにしたのであります。

最後に法的地位の問題です。日本には朝鮮人が六十万人居ります。在日朝鮮人は外国人ですから、本来ならば自分の国に帰って住んでもらうわけですが、在日朝鮮人は、日本人として日本にきて、永久に住むつもりでおったら、ある朝目がさめたら外国人になつておつた。朝鮮人はそういう特殊な立場にある外国人です。従つて一般外国人とはおのずから別の取扱いというか処遇をする必要がでてまいります。これがいわゆる法的地位の問題です。そこで終戦前から日本におつた人とその子供につき永住権を認めることを骨子とする協定を結ぶことになりました。ただ義務教育とか生活保護はどうするかというようなことは追つて相談しようということで、日韓交渉は大筋において一応の妥結を見たわけでありませう。

本来隣り合わせの国に交際がないというのはよくない。社会党がいうようにそれは東北アジアに軍事同盟をつくる素地であるとか、北朝鮮との統一を阻害することになるものであるとかいうような考えをもってやったものではないのです。社会党の諸君はなかなか創作が上手です。しかし政治は小説ではありません。現実をふまえて事業を処理する責任をもっております。われわれは日本の名譽にかけて、やるべきことをやっておるのでございます。日韓交渉はそのようにして十四年間の長い、しかもむづかしい交渉でありましたが、今回ようやくそれが妥結に辿りついたのであります。私はこの条約が近く国会で批准されることをみなさんと共に期待しております。

(昭四〇・四・一七)